

おりづきたやま
下津北山遺跡

調査の経過 下津北山遺跡は、稲沢市下津町地内に所在し、青木川右岸の自然堤防帯と三宅川左岸の自然堤防帯に挟まれた後背湿地に位置している。

周辺には、縄文時代から近世にいたる遺跡が散在する。本遺跡の所在する下津は、平安時代末から鎌倉時代初めに開かれた鎌倉街道の宿場として栄え、源平合戦のころ(1181年)に源行家、承久の変のころ(1221年)に北条時房、中先代の乱のころ(1335年)に足利尊氏が宿泊し、また、南北朝時代には、定期市が開設されたことが文献にも記載されており、室町時代に守護所が設置された下津城跡のような中世遺跡も多い地区である。本調査地も中世を中心とする遺跡であると推定されていた。

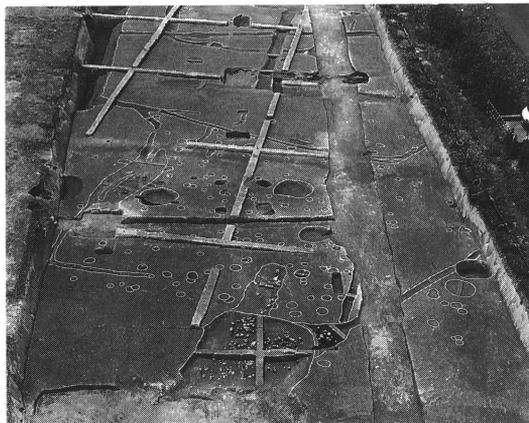
旧国鉄稲沢操車場周辺の再開発に先立ち、平成2年に稲沢市教育委員会によって試掘調査が行われた。その結果、中世の遺構が旧操車場にかかる確認され、従来確認されていた下津北山遺跡が西に広がると推定された。そして今回の調査は、尾張西部都市拠点地区開発に伴う事前調査として、住宅・都市整備公団により愛知県教育委員会を通じて委託を受け、2,000㎡を平成8年5月から9月にかけて実施した。(加藤博紀)



第1図 調査区位置図(1:5000)

調査の概要 今年度の調査区は遺跡が立地する自然堤防の東端部付近にあたるものと推定される。本調査区の基本層序はバラス、旧耕作土、黄褐色細粒砂層、黄褐色シルト層、暗褐色シルト層（中世の遺物包含層）、黄褐色シルト層の順となり、黄褐色シルト層上面で中世Ⅰ期（12世紀後半）、暗褐色シルト層上位で中世Ⅱ期（14～15世紀）の遺構を検出することができた。また、包含層中などから7～8世紀の遺物が若干出土しているものの、遺構としては確認できていない。操車場の建設に伴い、遺構面が一部分破壊されていたものの、そのほかは比較的良好に遺構が遺存していた。

中世Ⅰ期 中世Ⅰ期（12世紀後半）の遺構は溝（S D07、S D21）によって方形に区画された内部にそのほとんどが集約される。S D07は東西方向に走り、南へと屈曲するがその方位は西にやや振れる。S D07とS D21を拠り所として区画の一辺を復原すると、その規模は約60m（約方半町）になり、本調査区において区画の西半部を検出したかたちとなる。溝の幅は約3mを測り、溝の



掘立柱建物周辺

深さはS D07の屈曲部付近で最も深くなり、約1mを測る。溝は一部を除いて掘り直された形跡は認められず、比較的短期間のうちにその機能を失ったものと推定される。また、S D21の溝の底面ではピット列が検出される部分があり、橋が架けられ、出入口の一つとして利用されていたことも考えられる。

S D21から大量に出土した灰釉系陶器のなかには墨書も多く見られ、なかには「僧」と墨書されたものや、花押風の墨書が記されたものもある。これらの遺物に混じり、緑釉を施した土製の円塔（緑釉円塔）が1点出土している。さらに、灰釉系陶器の底部などを利用した加工円盤も大量に出土しており、その使用方法の一端を知るうえでの有効な事例となる。また、区画の北西隅にあたるS D07の屈曲部付近から出土した人形木製品と常滑産の小瓶は、地鎮の祭儀に用いられた可能性が考えられる。

方形区画の内部では、数条の溝と柵によってさらに小さい区画が設けられている。そのなかには多数のピットが集中する部分が存在し、掘立柱建物4棟が確認された。掘立柱建物は棟方向をほぼ東西あるいは南北の方位に揃えた状態で配されており、そのなかで中心となる建物（S B01）は桁行4間梁行2間で東と北側の2面に庇がとりつくものである。S B02は桁行2間以上梁行2間の総柱建物（倉庫か?）となる。S B01に重複する土坑（S K30）や、隣接する土坑（S K18）には大量の遺物の廃棄が認められ、特筆すべき遺物としてS K18から出土した陶硯（風字硯2点、長方硯1点）、「僧」と墨書のある灰釉系陶器椀、S K30から出土した三筋壺、広口瓶、常滑大甕などが挙げられる。

井戸は区画内部に3基認められたが、いずれも掘り方は浅く、構造物は遺存していな

かった。S E 04 では掘り方の底面に灰釉系陶器碗3点・小皿2点と柄を抜き取った状態の柄杓、箸、獣骨が並べられた状態で廃絶されていた。

中世Ⅱ期 中世Ⅱ期（14～15世紀）の遺構は、その多くが調査区の北側と南側に集中し、幅約10mを測る大溝、東西方向に並行して走る3条の溝、井戸3基などがある。大溝はS D 07・21とは対照的に幾度となく掘削された形跡がうかがわれる。井戸はS D 07 に重複して1基（S E 01）、調査区の南側に2基（S E 05・06）検出され、S E 05では井筒として利用された曲物が遺存し、S E 06はその痕跡を残していた。S E 05とS E 06の周辺にはピットが集中し、14～15世紀代の居住域を調査区の南側付近を中心に想定することが可能である。

まとめ 中世Ⅰ期の方形の区画は、その規模や出土する遺物の組成からみて当時の有力農民の屋敷地に伴うものとしては相応しくない。仏教的色彩の濃い遺物や「僧」の墨書を重要視するならば、比較的簡単な仏堂を備えた集落内の寺院とする見方もできよう。あるいは消極的ながら、特定の寺院など固定した場所にとどまらない僧侶が、幅広く活動した一つの場所として捉えておくべきであろうか。中世Ⅱ期の遺構のほとんどが、方形区画外に展開していることも、この方形区画の性格を考えるうえで参考になる。いずれにせよ、中世初頭における地方仏教行政との関連をも視野に入れつつ、遺構・遺物の考察をすすめる必要がある。（早野浩二）



S D 21 遺物出土状況



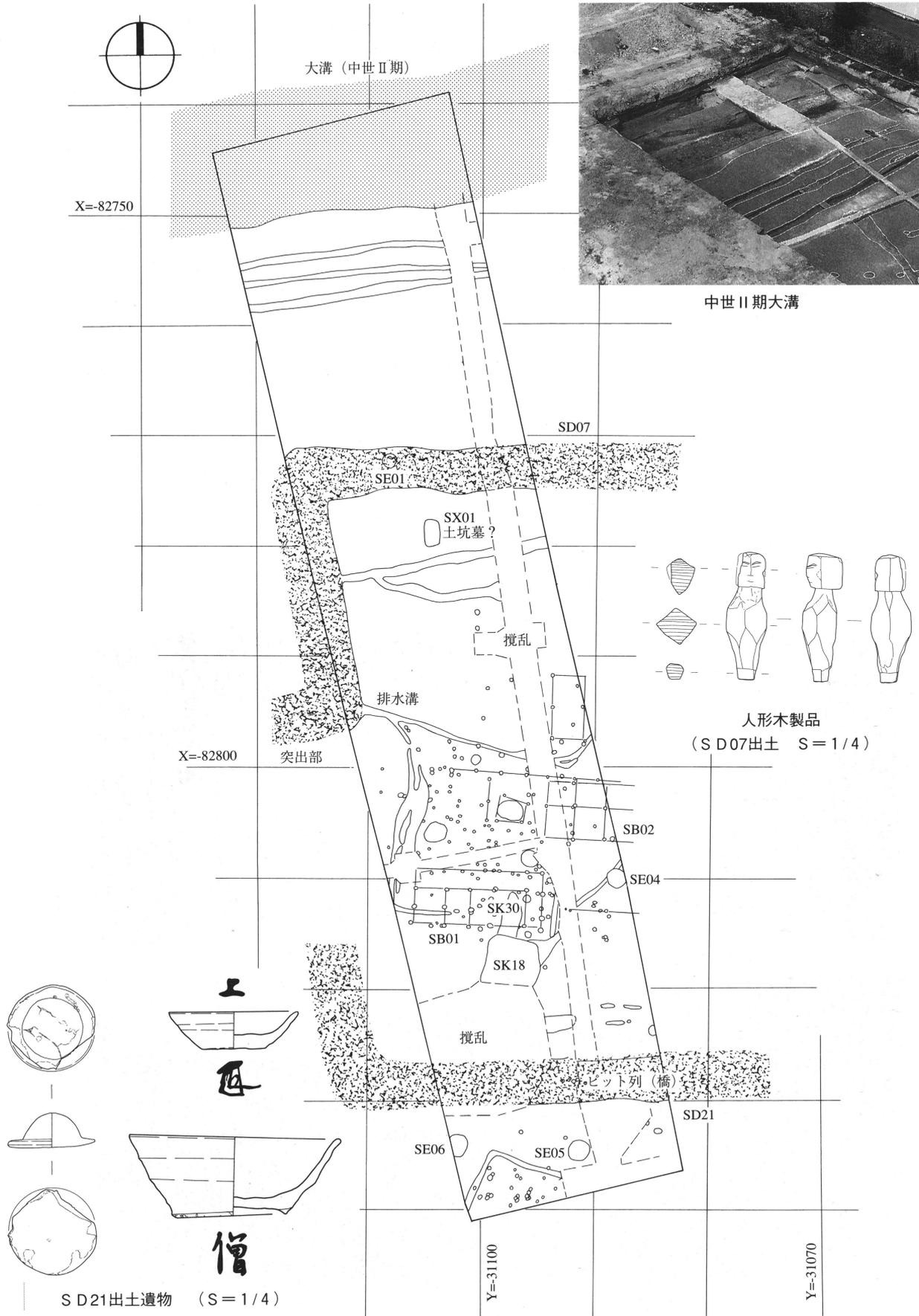
S D 21 墨書土器出土状況



S D 17 小瓶出土状況



S E 04 遺物出土状況



第2図 主要遺構配置図 (1 : 500)